

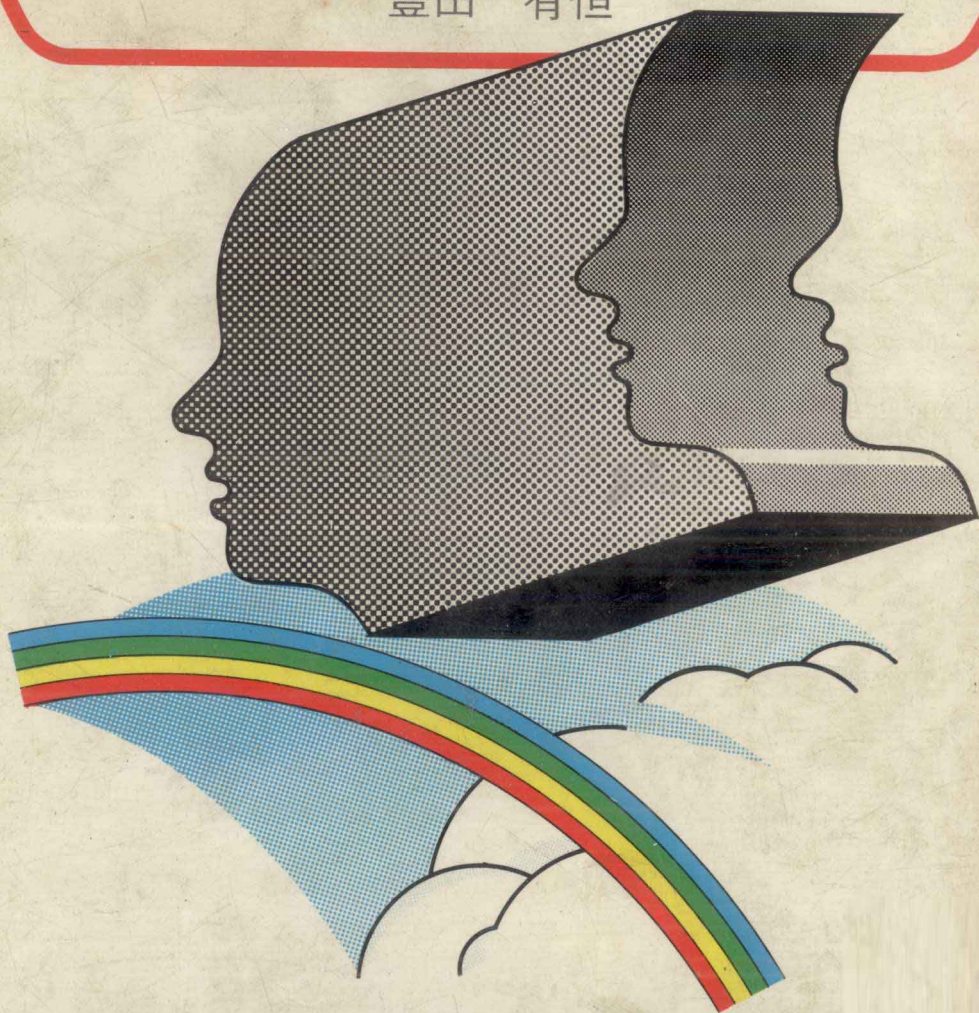
毎日新聞

SF

シリーズ

マーメイド戦士

豊田 有恒





マーメイド戦士

豊田有恒



●著者紹介

豊田有恒(とよた・ありつね)

1938年群馬県生まれ。1964年武蔵大学経済学部卒。虫プロダクションに勤務して1965年退社、著作活動に入る。日本推理作家協会、日本SF作家クラブ会員。主

毎日新聞SFシリーズ《ジュニア版》7

マーメイド戦士

¥ 500

1970年4月20日 印刷

1970年4月30日 発行

著者 © 豊田有恒

編集人 宇野嘉彦

発行人 星野慶栄

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋1-1-1 ☎ 100

大阪市北区堂島上2-36 ☎ 530

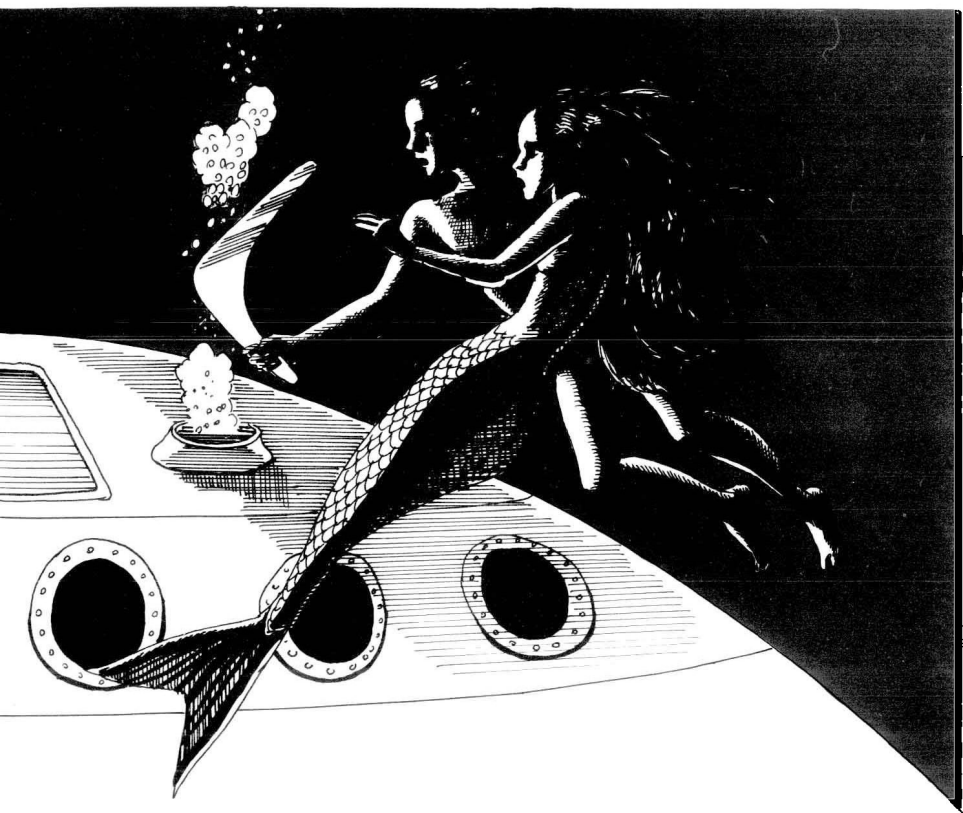
北九州市小倉区紺屋町7-207 ☎ 802

名古屋市中村区堀内町4-1 ☎ 450

<検印省略>

印刷・共同印刷 製本・大口製本

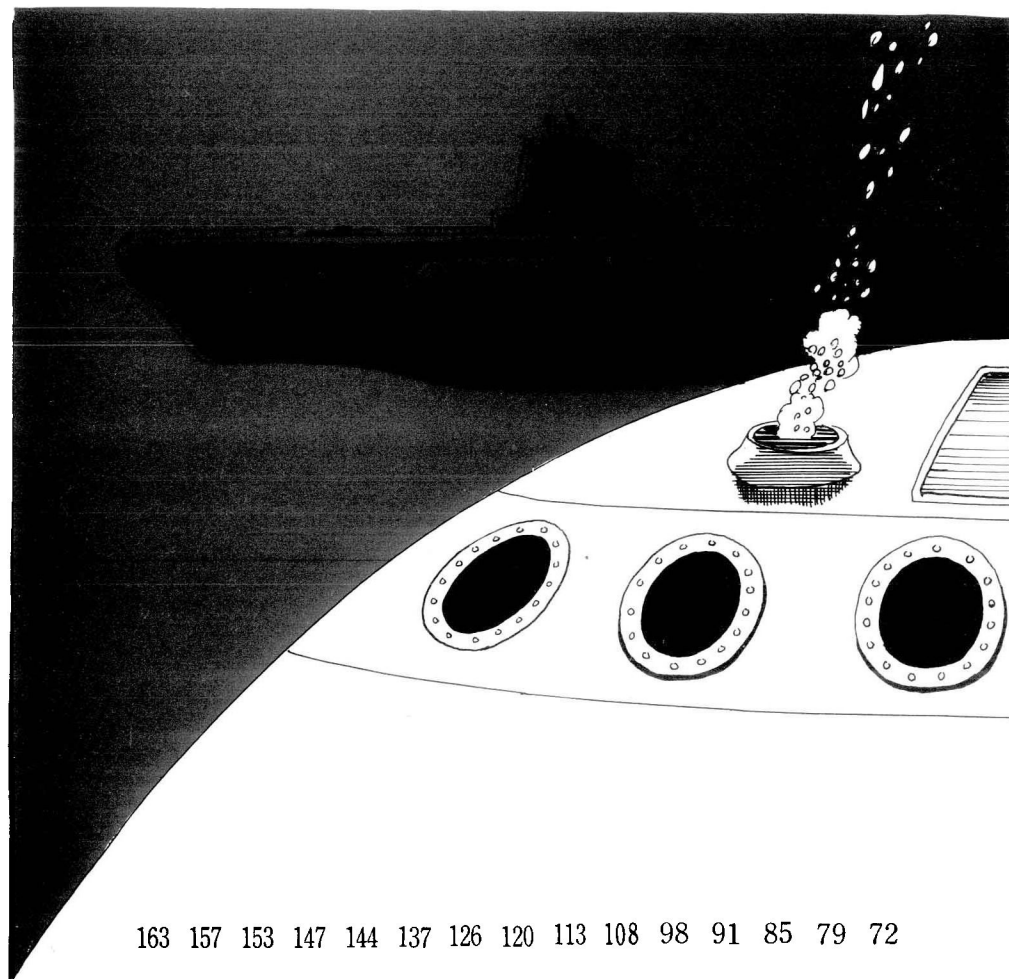
8093-543007-7904



《目次》

マーメイド戦士

- | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---------|-------|-------|------|----------|--------|-------|---------|-------|-------|-----|-------|
| 65 | 61 | 54 | 49 | 44 | 37 | 30 | 25 | 20 | 18 | 14 | 10 | 6 |
| ふさると日本 | 海へビの洞くつ | 海底の戦い | 女王ルピア | 人魚の城 | あやしいトラック | 国際海洋学会 | サプの変身 | あらわれた人魚 | サプの秘密 | ふしぎな女 | 嵐の海 | 海洋研究所 |



163	157	153	147	144	137	126	120	113	108	98	91	85	79	72
人間と人魚	ムー大陸	人魚のみやこ	アリア姫	ケーブ・ケネディ	エバグレース国立公園	バシヨウカジキ	イルカ牧場	海底のドーム	イルカの行くえ	オラルセン博士	ローランド島	ヘルジンゲル号	水中サイボーグ	竜神池のナゾ

マ
ー
メ
イ
ド
戦^{せん}
士^し

ここは、紀伊半島にある小さな漁村、青海村である。せまい浜べのあちこちに、古ぼけた漁船がおい
てあり、そのうら手は、けわしいガケにかこまれている。

「サブのやつ、やつつけてやる。」

「漁師のせがれのくせに、魚とりがきらいだなんて、なまいきだぞ。」

とつぜん、浜べの松林のなかで、子どもたちの声がわきおこった。五人ばかりの子どもにとりまかれ
て、たった一人であばれまわっているのが、この物語の主人公サブである。

サブは、むちゆうで手をふりまわしているが、だしぬけにとびつかれて、ひっくりかえってしまった。
そこへ、ほかの子どもたちがとびついて、手足を持って、かかえあげた。

「どうする？」

「海へほうりこんでしまえ。」

子どもたちは、サブをかつぎながら、浜に近いガケの上へのぼっていった。

「一、二、三。」

かけ声とともに、サブのからだは、マリのようにほうりだされ、十メートルも下にある海へ落ちてい
った。それから、しばらく、サブはしずんだまだった。いつまでも浮かんでこないで、子どもたち
は、心配になった。

「はははは。」

とつぜん、サブの笑い声がきこえた。さっきほうりこまれたところから、五十メートルも沖のほうで、

サブは、ポツカリ首をだして浮かんできた。

「あいつめ、すばしっこいやつじゃ。」

「まったく、さかなみたいじゃ。」

子どもたちは、ブツブツいいながら、ひきあげていった。サブは、ゆかいそうにガケのほうを見ていたが、きゆうに思いついたように、沖へむかっておよぎはじめた。

こうして、水につかっていると、とても気持ちがいい。陸にあがっているときより、ずっと楽に動けるような気がする。それが、ほかの子どもと、サブのちがうところだ。

そのとき、とつぜん、モーターボートの音が近づいてきた。それは、みさきにある海洋研究所のボートで、乗っていたのは、サブと仲のいい桂木（技官）という青年だった。

「今ごろおよいでいるなんて、きみらしいな。さあ、乗れよ。」

桂木は、目をまるくした。もう日がくれかけているというのに、水泳をしているサブに会うとは、思わなかったのだろう。

サブは、ボートにはいあがった。なかには、沖のイクスからとってきた、イセエビがはねまわっている。研究のため標本にするつもりなのだろう。

「なあ、サブ。おまえのおとうが心配していたぞ。漁師の子なのに魚とりがきらいではしょうがない。」

桂木は、しゃべりはじめた。

「おれ、魚を見ていると、なんとなく、なかまみたいな気になってくる。だから、つかまえて、ころし

てしまうのが、かわいそうなんじゃ。」

サブは答えた。いくら、おとうにぶたれても、漁師にだけはなりたくない、がんこにきめているのだ。

そのとき、とつぜん、あたりが明るくなった。海の上に、月がのぼりはじめたのである。

サブは、だしぬけに、のどをおさえて、苦しみはじめた。

「うっ、苦しい。」

サブは、よろよろと、ボートの上をあるきはじめた。

「どうしたんだ、サブ。」

桂木は、びっくりしてきいた。なにがおこったのかわからないが、この少年が、いきなり苦しみはじめたようすで、ただごとでないと思ったのだろう。

だが、サブは、そのまま、あおむけに、海のなかへ落ちこんでしまった。

いったんしずんだサブのからだは、ボートの近くに浮きあがった。

「いったい、どうしたんだ。」

「だいじょうぶ、心配ないんだよ。」

サブは、答えた。さっきより、苦しもうではなくなっている。そして、サブは、クルリとむきをかえて、ものすごいスピードでおよぎはじめた。

桂木技官は、ボートの上から、あつけにとられて、サブを見送っていた。

それは、月夜の晩だった。次郎作の小屋に、一つのかげが、近づいた。

サブである。サブは、海からもどってきたのだ。びしょぬれで、とても、つかれているようだった。

「おそかったな、サブ！」

「おとう！」

サブは、次郎作のところへ、かけよった。

「おとう、きょうも、みんなに海んなかへ、ほうりこまれたんじゃ。」

「そうか、また、あれが、おこったんじゃな？」

「そうじゃ、桂木さんのボートの上でとっせん……。」

サブが、いいかけたとき、次郎作が、はっとしたような顔で、きいた。

「それで、おまえのからだの秘密を、桂木さんに、見られてしまったのか？」

「おれ、むちゅうで、海んなかへとびこんだ。おとう、おれは、かたわ者なんじゃ。みんなとちがうんじゃ。どうして、おれだけ、ちがうんだ？ おしえてくれ、おとう？」

サブは、なきながら、次郎作に、とりすがった。

「わしは、な、そのことだけは、口がさけても、いわんと決心した。」

「でも、おとう……。」

「サブ、いずれ、わかる 때가くる。な、サブ、そのことはもうきかんでくれ。わしも苦しいんじゃ。」
次郎作は、サブをかたくだきしめた。

サブの秘密、それは、いったい、なんだろうか？ それを知る人は、次郎作だけなのである。でも、次郎作は、おしえてくれない。そのことを話したくないらしいのだ。そこで、サブは、ある決心をかためた。サブのからだの秘密、そのナゾをとこうときめたのである。

海洋研究所

ここは、青海村の入り江のみさきである。入り江を見まもるように、ここに、白いコンクリートの建物物がたっている。海の生物や、潮の流れなどをしらべる、海洋研究所である。

桂木技官は、きのうのことを、所長の海野博士に、話していた。

「なに、魚みたいなスピードで、およいでいったのだと？」

海野博士が、きいた。

「ええ、いくら、漁師の子でも、あんなスピードで、およげるはずがありません。まるで、オリンピックク選手みたいでした。」

桂木技官が、びっくりしたような声で、説明した。

「それに、あの子は、漁師の子ともなのに、魚とりが、きれいなのです。」

「なに、魚とりが、きれいなのだと？」

所長の海野博士のひとみが、めがねのおくで、キラッと光った。そのとき、ブザーがなった。桂木技官が、ドアをあけると、サブが立っていた。

「やあ、サブ、よく来たね？」

桂木は、研究室に、サブを、つれこんだ。

「きみが、三郎くんかね？」

「はい。」

海野博士にいわれて、サブは、うなずいた。

きよう、研究所へ来たのは、あの秘密を話すつもりだったのである。

「きみは、海にもぐるのが、とくだそうだね？」

海野博士が、ぞっとするような、つめたい声でいった。そして、博士は、サブをとなりのへやへ、案内した。そこは、床の一部分が、水そうになっているへやだ。

魚でもいるのかと思って、サブが水そうをのぞきこんだ。

そのとき、とつぜん、海野博士は、サブの背なかをドスンと、つきとばした。

「うわーっ。」

サブは、ふいをつかれて、水そうに落ちこんだ。

「ふふふ、まもなく、おまえの正体がわかるのだ。わしの長年の研究が、はつきりみとめられるのだ。」

海野博士は、ぶきみに笑いながら、かべのスイッチをおした。

するとサブの落ちこんだ水そうが、スルスルと、せりあがりはじめた。

水そうは、ガラスでできているので、ながが、見えるようになっていた。

ゴボゴボ、ゴボゴボ。水そうの水は、ぐんぐん、ふえていく。しかも、水そうの上のほうは、天じょうに、ピッタリついているので、にげだすきまがない。

「先生、なにをするんです。」

「うるさい、わしの研究のじやまをするな。」

とめようとする桂木技官かつらぎ かんを、海野博士うんの はくしは、おそろしい声でどなりつけて、水そうのなかを見つめた。とうとう、水そうの上まで、水がいっぱいになってしまった。

サブは、なんとかにげだそうと、水のなかでもがいていたが、どうにもならなかった。

水そうのなかに、空気がのこっていないので、このままでは、サブは、おぼれ死んでしまうだろう。「先生、やめてください。サブが、死んでしまいます。」

桂木技官かつらぎ かんは、なんとかして、海野博士うんの はくしをとめようとする。

「ええ、うるさい！」

海野博士うんの はくしは、桂木技官かつらぎ かんを、力いっぱい、つきとばした。

一分たった。

サブは、水そうのなかで、苦しそうにもがいている。

二分たった。

そのとき、研究室のドアが、ものすごいきおいで、ひらいた。

たたきつけるように、ドアをおしあけて、次郎作じろさくがとびこんできたのだ。

手には、モリをにぎりしめている。

「海野博士、サブをはなしてもらおうか。わしの目の黒いうちは、サブに手だしはさせん。」

次郎作の目は、怒りにもえていた。

「わかつてくれ、次郎作、わしの研究には、サブが、必要なんじゃ。」

「だまれ、サブをはなさんと、このモリを、おみまいするぞ。」

次郎作は、モリをかまえたまま、ぐいとすすみでた。

「わ、わかった。サブをはなすから、らんぼうは、やめてくれ。」

海野博士は、モリをつきつけられて、しかたなく、かべのスイッチに、手をのばした。

水そうの水がへっていった。そして、水そうがさがりおわると、桂木技官が、サブを助けた。

サブはグツタリしていた。

「おとう！」

「サブ、しっかりしろ。」

次郎作は、サブをかかえあげた。

「次郎作、そっちが、その気なら、なにもかも、ばらしてやるぞ。」

海野博士が、にくにくしげに、さげんだ。

「なんだと？」

「いいか、わたしには、サブの正体が、わかってるんだぞ。おとなしく、わたしに、あずければ、この秘

密は、だまってやろう。」

「いやだ、わしのむすこは、モルモットじゃない。さ、サブ、帰ろう。」

次郎作は、サブをかかえて、あるきだした。

研究所を出て、入り江のまわりをまわると、青海村を、ひと目で見わたすことができる。

青い空のもとの、水平線が、くつきりと光っていた。

「な、サブ、あしたは、おとうと、漁にいこう。」

次郎作が、やさしくいった。

嵐の海

その日は、とてもいい天気だった。

青海村から、沖へむかって、一せきの漁船が、入り江を出ていくところである。

次郎作の船だ。サブは、約束どおり、いっしょに、漁に出たのだった。

沖へ出ると、次郎作は、あみをおろして、魚をとりはじめた。

でも、サブは、へさきにすわったまま、じっと海のかなたを、見つめていた。

サブは、小さいときから、魚をとることが、すきになれなかった。いくら、次郎作におこられても、

生まれつき、漁をすることが、きらいなのだ。だから、漁に出るとき、サブは、いつも、船のへさきに

すわって、じっと、海を見つめているだけなのだった。

次郎作は、しだいに沖のほうへ船をすすめた。

はたらいっているうちに、青海村の入り江は、ずっと遠くなり、見えなくなった。

そのとき、水平線に、黒い雲が、ポツンとあらわれた。

黒い雲は、みるみるうちに、ひろがっていった。

「やや、いかん。嵐になりそうじゃ。」

次郎作は、はっとして、空を見あげた。

黒い雲は、むくむくと、おそろしいいきおいでひろがりながら、しだいに近づいてきた。

「おとう、たいへんだ。」

サブも、顔色をかえた。海の天気は、かわりやすいものである。

さっきまで、かがみのように、しずかだった海は、きゆうに波だち、あれくるってきた。

小さな船は、流れにおし流される木の葉のように、もみくしゃにされた。空いっぱいひろがった、

黒い雲から大つぶの雨が、たたきつけるようにふってきた。

「しまった、エンジンをやられた。」

次郎作は、さけび声をあげた。

はげしくゆれる船の上で、次郎作は、くちびるをかみしめた。

はげしい波にもまれて、エンジンが、こわれてしまったのだ。青海村へ、帰ることはできない。

「おとう、どうする？」

「うーむ、嵐がやむまで、この小船が、もつてくれるとええんじやが。」

風と雨は、ますます強くなつていった。

船よりも、高い波がはげしくおそつてきた。このぶんでは、嵐は、まだまだつづきそうである。

「うわーっ、帆柱がすつとぶ。」

サブは、ひめいをあげた。

船の帆柱が、ゆみのようにまがり、そのまま、へしおれてしまった。

そこへ、はげしい横波がおそつてきたから、たまらない。サブと次郎作を乗せた、小さな漁船は、いっぺんにひっくりかえつてしまった。

サブは船からころげ落ちて、海のなかへとびこんだ。海の水のつめたさが、サブを元気づけた。

「おとう、おとうーっ！」

サブは、さけびながらおよいだ。

サブは、小さいときから、およぎだけはだれにも負けたことがなかった。水のなかにはいっただけで、生まれかわつたような気持ちになるのだった。

サブは、波にもまれながら、小さな板きれにつかまっている次郎作のすがたを、発見した。

「おとう！」

サブはぬき手をきつて、次郎作に近づいた。

しかし、波がはげしいので、なかなか近よれない。次郎作は波にまきこまれそうである。そのとき、